

◎シリーズ 長岡京歴史散歩

114

長岡京期の製塩土器消費
〜神足での調査から〜

長岡京駅の南西約150mでの発掘調査で、大量の製塩土器が出土しました。

製塩土器は、海辺で海水を煮詰めて塩をつくるときに使われた器です。長岡京の調査では、よく見かける器なのですが、まとまって出土する場合は限られています。また、ほとんどの場合、粉々に砕けていて、なかなか全体の形に復元できません。ところが、この調査で8000点を超える破片が、溝や穴からまとまって見つかりました。しかも、完全な形に復元できる個体が幾つかあることもわかりました。

長岡京に運ばれた製塩土器には、塩が詰まっていたと思われる。神足に土器とともに運ばれてきた塩は、いったい何に使われたのでしょうか。まず、調味料や食品加工を含めた食用が考えられます。また物づくりや祭祀に使われる場合もあります。同時期の遺構群との関連を考慮する必要があります。ありますが、どちらとも言いがたいのが現状です。

製塩土器が出土する遺構からは、日常生活に使われていた土器類も出土します。その基本的な組み合わせは、酸化炎で焼かれた土師器と呼ぶ器と、窯で還元炎焼成された須恵器と呼ぶ灰色の器です。今まで、製塩土器が出土する遺構のほとんどは、須恵器の比率が多く、土師器が少ないとされています。ところが、今回の製塩土器出土遺構は、土師器がほとんどで、須恵器はごくわずかでした。東神足一丁目（長岡京駅東口広場）での調査で検出した遺構もそうでした。

長岡京跡では、須恵器が多い箇所は下位階層の

人たちに関連するものと考えられています。そして、公的機関に付随する下位階層に関連する所に、製塩土器の消費が著しく、土師器が高率を占める調査例は無いとされていました。しかし、土師器対須恵器が20対1、またはこれに近い数値を示す遺構が、神足周辺で5カ所も見つかっています。これらの遺構群には、製塩土器消費に絡む、重要な力ギが秘められているのではないかと考えられます。



▲製塩土器の出土状況と復元できた土器